

『雨の日の書』序

今年の冬は特に雨が多い。冬だから、やはり盆を傾けたように降るのは具合が悪いのだろう。ただ蜘蛛の糸のようにしとしと落ちてくる。雨は何も見えないくらい細かいけれども、空の色はとても陰鬱で、まったく気を腐らせる。こんなときにはいつもある空想を引き起こす。もし江村の小さな家で、ガラス窓に寄り、白炭の火鉢にあたって、清茶をすすりながら、友人と閑談するなら、ずいぶん愉快的な事だろうと思う。だがこうした空想は当然のこと実現の見込みはなく、また空を見ると、やはりいよいよ陰鬱になる。少しは真面目な仕事をしようとしても、気持ちが散漫で、まるで気の抜けた焼酎のようで、少しも味がしない。仕方なく手に任せて二行書くが、特に別に考えが出るわけではなく、いささかこの雨の日の気鬱な時間を相手にしようというまでである。

冬の雨はいつも降るものではない。日没後晴れなければ雪か霰になる。しかし晴れて雪が明るいときにも、人々の心にはやはり雨の日があつて、しかも陰鬱な期間がもっと長くなるかもしれない。したがってわたしのこの雨の日の随筆も続けて書かれる機会があるだろう。一九二三年十一月五日、北京にて。

※初出：1923年11月10日『晨报副刊』